

季節のおまつり

## 西条祭



担ぎ上げて進む

瀬戸内海の沿岸部には、岡山から時計回りに兵庫、大阪、さらに淡路島をはさんで香川、愛媛まで「屋台」とか「太鼓台」、「ちようさ」（太鼓屋台）と呼ばれる山車を担いだり曳いたりする祭が数多く点在する。温暖な気候の瀬戸内ではあるが、人々の祭に対する情熱には並々ならぬものがある。

西条祭のメインでもある伊曾乃神社の祭礼は、担ぎ屋台形式の山車が八十台余りと「御輿」と呼ばれる太鼓台四基が奉納され、その

数において全国的にも類のないものである。

十月十五日の未明、百余個の提灯に飾られただんじりや御輿が宮出しのため神社境内に集まつてくると昼のように明るくなり、そこで勇ましい太鼓や鉦で御神輿を迎える。御神輿は御輿と名称が似ていて紛らわしいが、伊曾乃神社に一基のみ属する大人神輿である。

その後境内をあとにしただんじりは、各地区内を運行して御旅所へ向かい一夜を過ごす。

十六日はそれらだんじりや御輿が早晚に再び集まり、御神輿のお供をして氏子区域を統一巡行し、夕刻加茂川の河川敷にだんじりと御輿が勢ぞろいする様は圧巻である。夕刻五時頃から御神輿はひとり離れて奉送され、対岸の神社を目指してクライマックスの「川入り」となる。御神輿が水深五六十七センチ位の清らかな流れの加茂川を渡り始めると、別れを惜しむ地元のだんじり十数台が宮入りを食い止めようと川の中で競り合う光景は西条祭の最大の見せ場である。対岸に提灯に灯の入っただんじりがずらりと並んで、御神輿が無事還御するのを見守っている様は、三百年以上の伝統を伝えて実に壯觀である。

(写真・文 宮本卯之助)



だんじりが勢ぞろいした加茂川にて、御神輿の「川入り」風景

# 太鼓むかしばなし

## 鼈太鼓製作

平安の頃より日本の雅な音楽を奏でていた樂器の一つ、鼈太鼓。太鼓を囲むように火焰の彫刻が施されており、火焰太鼓とも呼ばれています。左右一対として、雅楽の舞台に対して東西に配置されます。陰陽五行思想に影響を受け、火焰部分には龍と鳳凰、打面には三つ巴と二つ巴、上部には太陽と月を模した日形と月形がそれぞれに配されます。大きな打面から響き渡る音は、まるで天地を呼び覚ますかのような莊厳さです。宫廷の大内樂所、奈良の南都樂所、大阪の天王寺樂所の三方樂所によって固く守り継がれてきました。



東京オリンピック開会式にて、弊社6代目

一九六四年、東京オリンピックの開会式に鼈太鼓を提供した際には、各地に伝存する様式をそのままに、火焰部分を組立て式にするという改良を加えました。移動を想定し、従来の造りよりも分割できるようになっています。お納めにおいては、今も昔も職人が随行し、白衣をまとつてお払いを受けてから、ご奉仕にあたります。千年

を越えて受け継がれてきた歴史の重みを感じるとともに、未来までも貢献していくないと考えています。

では菊花展が催され、形も色もどりな菊が見事に咲き誇ります。古来より菊を愛好してきた日本人の秋の楽しみが、形をかえて今なお続いている。



## 菊供養会

三月の雛祭り、五月の端午の節句、七月の七夕と同じく、秋になると楽しまれてきた行事があります。九月九日重陽の節句は、別名を菊の節句と呼び、菊を楽しむ節会が催されました。平安時代の宮中では、杯に菊の花びらを浮かべるなどして酒宴を楽しんでいたようです。「菊の露を飲み長寿を得た」という中国の伝説が元になつています。それは文化、芸術の源泉にもなり、能「菊慈童」や絵画、工芸作品が生み出されてきました。

残暑の厳しい現在では、秋深まる十月に菊の催しが行われるようになっています。浅草寺では、毎年十月十八日に菊供養会が執り行われています。本堂にて菊を献花すると、長寿のご利益を得られるという菊のお守りをお授けいただきます。また、境内

## 古典・芸能へのとびら

## つけ木、つけ板

歌舞伎の演目がクライマックスを迎える、登場人物の感情が高まった時、バツタリバツタリと聞こえてくる音があります。「つけ」と呼ばれる演出は、これぞ歌舞伎と思わずにはいられません。そんな「つけ打ち」に使われる道具、つけ木とつけ板。重要な役どころを大きく見せたり、悲しみを強調したり、人物の気配を伝えたりしています。

劇場の太向こうまで響くバタンバタン、バツタリという音は、舞台の上手で、櫻の一枚板に、櫻のつけ木を打ち付けることで生まれています。つけ板は何の変哲もない板に見えますが、櫻材の中でも堅い部分が選ばれ、表面は歪みなく木目もなめらか。幅広のカンナで仕上げています。また、つけ木には、櫻材の芯に近い最も堅い部分が使われ、独特の音色がこだまします。

打ち込まれたつけ板は、削り直しが行われ、それらがまた新たな興行で鳴り響きます。弊社も連綿と携わる、歌舞伎の音です。

気がつけば朝夕に過ごしやすい日が増えてくると、いよいよ祭と芸能に満ちた文化の秋を迎えます。中でも瀬戸内は勇壮でバラエティに富む祭礼が多いのが魅力。関東の人間としては、そこのかとない憧憬の気分があります。今回ご紹介した西条まつりもその一つ。時に激しく生命力溢れる四国の祭は、御靈を奮わせる上で地域により強いご加護を願う祭といえるでしょう。余談ですが四国では今でも平日開催の祭も多く、祭が生活に根づいている様子が良く分かれています。

一方で厳かに行われる祭として、各地での雅楽奉演があります。観客でなく、神様に向かつて奉納される舞と調べは、莊厳に神樂を捧げる事で人々の安寧を願う祭のもう一つの姿でしょうか。この国の文化の多様さがよく現れる秋。皆様も是非足を運んでみて下さい。

代表取締役社長

宮本芳彦

発行	株式会社宮本卯之助商店
企画広報室	〒111-1035 東京都台東区西浅草二丁目一 電話 (03)3384-4122
	www.miyanoto-unosuke.co.jp